

ヤナギ

宮内 泰之

(人間社会学部社会園芸学科)

Salix

MIYAUCHI Yasuyuki

1. はじめに

ヤナギはヤナギ科ヤナギ属 (*Salix*) の落葉樹の総称である。国内に自生するものだけで30種ほどがある。花は単性で雌雄別株。平地では3月から4月初頭にかけて開花するものが多く、春を告げる樹木の一つである。また、ネコヤナギのように雌花序全体が銀白色の毛で被われるものは観賞対象にもなる。河原や池辺などの水湿地に生育する種が多いが、比較的乾燥した土地や、亜高山に生育する種もある。

萌芽力が旺盛で地際から繁茂する様子や、早春に他の植物に先立って芽吹くことから、昔から洋の東西を問わず生命力に満ちたものの象徴として捉えられてきたようである。一方、シダレヤナギのように水辺で枝葉を垂れ下げている様子を死や霊的なものと結び付けて考えていたことも、日本だけではなかったようである。なお、和名は材を矢の材料として使ったため、「矢の木」から転訛したという説がある。

園芸・造園的な利用としては、数種が庭木や街路樹として植えられるほか、生け花の枝物として利用されるものがいくつかある程度である。かつては、行李やまな板、楊枝などの材料としてその材が利用されていたが、今日ではあまり見られなくなっている。



写真1. バッコヤナギ 雄花序

2. 日本に自生するさまざまなヤナギ

ヤナギと言って多くの方が思い浮かべるのは、シダレヤナギである場合が多いだろう。しかし、シダレヤナギは古い時代に今の中国からもたらされた外来植物で、日本に自生はない。日本にもともと自生するヤナギはシダレヤナギのような細長い葉ではなく、楕円形披針形の葉を持つものが多い。ただし、種類が多い割に葉に目立った特徴がないためか、実物を目にしてもヤナギと認識されないことも多い。花も実も地味で、花期には葉がないか開花と同時に展葉するため、花と葉を関連付けておぼえることも難しい。しかし、葉の裏面を見てみると大半のヤナギは程度の差はあるものの白っぽく見えるため、少し見慣れるとヤナギの葉であると感じとることができる。

ここでは関東地方の河川中流域より下部でみられる主なヤナギについて述べていく。

- ①ネコヤナギ (*S. gracilistyla*):花をネコの尻尾に見立てたことからその名前がある。葉は小判形で、裏面全体に白い短毛が密生するのが特徴である。日本産のヤナギと言えば、この名前を最初に思い浮かべる方も多いのではないだろうか。主に河川の水際に生育し、その折れにくいしなやかな枝は川の流に適應している。古くに「かはやなぎ」と呼ばれていたものの多くは本種のようなものである。護岸改修などの影響で次第に姿を消しているが、近年では多自然型の河川形態が見直されつつあり、河岸部にネコヤナギが植栽される事例も増えている。庭木としての利用は多くはないが、新春の生け花の花材として切り枝が使われる。本種とバッコヤナギ (*S. caprea*) との雑種をフリソデヤナギ (*S. × leucopithecia*) という。振袖火事として知られる明暦の大火 (1657年) の火元とされた本郷の本妙寺 (現在は巣鴨に移転) に植えられていたため、その名がついたという。冬芽が赤いため別名をアカメヤナギといい、花材として用いられる。また、突然変異によって生まれたと推定されるクロヤナ



写真2. ネコヤナギ

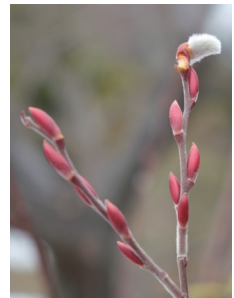


写真3. フリソデヤナギ 冬芽

ギ(*f. melanostachys*)は花の苞が黒く若枝が赤いため、これも花材として使われる。

- ②イヌコリヤナギ(*S. integra*):役に立たないコリヤナギ(*S. koriyanagi*)という意味で、川沿いに多く見られる。ヤナギのほとんどは互生(葉が互い違いに着く)だが、本種は概ね対生(葉が対になって着く)であるため容易に見分けられる。本種の園芸品種である‘白露錦’(*‘Hakuronishiki’*)は、新葉がピンクがかり、やがて白色から白い斑入りの葉へと変化する。昭和初期に日本で作出されたと言われるが近年ようやく人気が出てきたようで、庭などでたびたび目にするがある。コリヤナギも同じく対生であるが、こちらは朝鮮半島原産とされる。日本ではかつて柳行李の材料として栽培されたが、近年では柳行李と共にあまり見られなくなった。



写真4. イヌコリヤナギ

- ③オノエヤナギ(*S. udensis*):牧野富太郎が四国山中の峰の上(おのえ)で採取したので、この名前を付けたそうであるが、実際には山地から低地の谷沿い、水辺に多く見られる。葉の先が長くとがり、縁が裏側にやや巻いている点が特徴である。枝が部分的に異常に扁平化する帯化現象のために幅が5~6cmになったものをセッカヤナギといい、生け花の材料として珍重される。



写真5. オノエヤナギ

- ④カワヤナギ(*S. gilgiana*):その名の通り、本種も川沿いに自生する。葉はシダレヤナギよりも幅が広く、元から先までほぼ同じ幅、あるいは先の方がやや幅が広くなるという点で見分けることができる。冬芽が赤く大きいので、ときに生け花に用いられる。

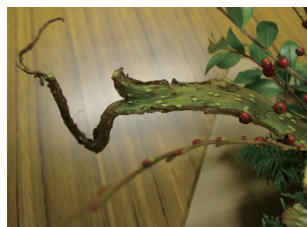


写真6. セッカヤナギ

- ⑤アカメヤナギ(*S. chaenomeloides*):新芽が赤いことからその名前があるが、葉が幅広い楕円形になるためマルバヤナギともよばれる。葉柄の基部に

大きな托葉がついているため、容易に見分けることができる。10m以上の高木になる。前述のフリソデヤナギもアカメヤナギの名前で売られている場合があるので、注意が必要である。



写真7. アカメヤナギ

以上の他、コゴメヤナギ(*S. dolichostyla* subsp. *serissifolia*)、タチヤナギ(*S. triandra* subsp.

nipponica)、ジャヤナギ(*S. eriocarpa*)なども川沿いに多く自生する。また、他の地域や、山地から亜高山帯にも様々な自生のヤナギがある。いずれも花・葉共に地味だが、かつての河川景観を象徴する植物であり、ときに利用されてきた意外にも身近な存在であることを記しておきたい。

3. 万葉集に見られるヤナギ

『万葉集』の巻19に、大伴家持による次のような歌がある。

「春の日に 張れる柳を取り持ちて 見れば都の 大道し思ほゆ」

この歌に詠まれている大道は奈良の都の大路とされることから、平城京には街路樹としてヤナギが植えられていたことがわかる。それでは、ここに詠まれた「柳」は何にあたるのだろうか。飛田(1998)は「この歌から大路にはシダレヤナギが植栽されていたことがわかる」、と述べている。確かに、奈良時代には唐風文化が流行し、植物も大陸から導入されたウメ、モモ、シダレヤナギ、ボタン、シャクヤクなどが好まれていたようである。ヤナギは『万葉集』だけでなく『懐風藻』にも多く詠まれ、平城宮東院庭園の発掘調査では花粉が確認され、シダレヤナギが植栽されていたと推定されている。

『万葉集』にはヤナギを詠み込んだ歌が30種以上ある。それらの原文の表記を見ると、「柳」の字を使ったものが19種、「楊」の字を使ったものが14種ある。水上静夫(1994)には、「中国ではヤナギの類を楊柳という。「柳」はヤナギ属の植物で、「楊」はハコヤナギ属の植物である。前者はその枝が垂流するように垂れ下がること、後者はその枝が揚起することからきた名称であるといわれている」、とある。万葉集では、「柳」と「楊」はどのように使い分けられて

いたのであろうか。

「柳」の場合、梅柳、青楊、しだり柳などのように表現されているものが19種中13種ある。詠まれた内容を見ると、春という言葉そのものや、梅、鶯と共に春を詠んだ歌が大半を占めている。また、「細き眉」や「糸」のように、枝や葉の細さを表現したのも4種見られる。しだり柳とあわせて、これらはシダレヤナギを詠んだものと考えてよいように思う。一方、「萌え」「張れる（芽吹くの意）」などのような萌芽力の旺盛さを連想させる表現は、それぞれ1種ずつである。

「楊」の場合、春楊、川(河)楊、刺楊、青楊などのように表現されているものが14種中10種に上る。詠まれた内容を見ると、春そのものを歌い込んだものは、半数以下の6種である。「しだり」や「糸」といった言葉を伴うものはない。一方、前述の「刺楊」のほか、「萌え」、「張ろ」、「伐れば生え」など、また、「末摘枯らし」という逆説的な表現も含めると、その萌芽力の旺盛さを連想させるものが10種ある。

つまり、万葉の時代には、「柳」と表記した場合には春の到来の喜びやヤナギの姿かたちを表現し、「楊」と表記した場合にはヤナギから連想される生命力を詠み込む、といった使い分けがある程度なされていたと考えられる。種類について「柳」の方は、おそらく大半がシダレヤナギを指しているとみてよいであろう。一方「楊」については、シダレヤナギも含まれている可能性はあるが「川楊」という表記があるように、古名の「かはやなぎ」、つまり、ネコヤナギなどの自生種を詠んでいる場合も多いのではないだろうか。

唐へのあこがれが強かった古代において、既にヤナギと言えば在来のヤナギよりもシダレヤナギを思い浮かべる人の方が多かったのであろう。しかし、万葉人の自然に対する観察力は現代人のそれよりも相当高く、また、今よりもはるかに身近な存在であった川辺に自生する在来のヤナギを見落としていたとは考えにくい。

『新漢語林』(2004)によると「柳」は「①しだれやなぎ。枝が細長く下に垂れる種類のもの。②やなぎの総称」、「楊」は「かわやなぎ。ねこやなぎ。(中略)枝は堅くて垂れない」とある。しかし、今日では「楊」という字を用いて在来のヤナギを表現することはもとより、在来のヤナギそのものを意識すること

すら稀になっているように思うのは私だけであろうか。

4. シダレヤナギとWeeping willow

シダレヤナギ(*S. babylonica*、別名イトヤナギ)は中国原産で、長江(揚子江)と黄河の流域に自生するとされる高木である(大橋1995)。原産地には野生の立性の個体群があり、その突然変異体であるシダレヤナギは過去に立性のものから選別され、栽培品として賞用が広がったものと思われる(長谷川2001)。これが既に述べたようにかなり古い時代に日本にもたらされ、奈良時代には早くも街路樹として利用されていた。それ以降も川端や池辺、田の堤やお堀端などの水に関わる所に植えられた。近代以降も街路樹として最も多く植えられた樹木の一つである。また、物語(特に怪談)や「柳の下の泥鰌」といった慣用句に見られるのもシダレヤナギで、多くの方にとってなじみのある樹木ではないだろうか。なお、日本でみられるシダレヤナギはほとんどが雄株である。



写真8. シダレヤナギ

ヨーロッパへは、シルクロードを通じて17世紀末にもたらされた。英名はWeeping willowである。旧約聖書詩篇第137篇に、「われらはバビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した。われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた」(日本聖書協会1983)、という描写がある。このヤナギはコトカケヤナギ(*Populus euphratica*、中央アジア、中東、北アフリカに分布)であるとされるが(大橋1995)、スウェーデンの博物学者リンネはこれをWeeping willowと誤認して*S. babylonica*(バビロンの柳)と命名したと考えられている。バビロニア、つまり現在のメソポタミアには自生はない。Santamour(1988)も讚美歌における同様の誤認を指摘しているが、同時に、リンネの標本庫に保管されている*S. babylonica*の4枚の標本のうちの一つに「China」という文字が見られることから、リンネがアジアを起源にしていることを知らずに*babylonica*と名付けたとは言い切れない、とも述べている。つまり、日本のシダレヤナギと欧米のWeeping willowは、いずれも現在の中国を起源とする*S. babylonica*という同一種であるということになる。

北村（1979）はシダレヤナギを*S. babylonica* var. *lavalleyi*とする一方、ヨーロッパのWeeping willowをセイヨウシダレヤナギ*S. babylonica* var. *babylonica*とし、「シダレヤナギに比し、花序の柄が長いので区別される。雌本であるが、ときに雄花をつける」と記している。従って、変種レベルで異なるものとしているが、現在、シダレヤナギの正名は*S. babylonica*で var. *lavalleyi* はシノニム（異名）となっており、近年の図鑑の多くはこれになっている。

先に引用したSantamour（1988）は、現在北米で栽培されているほとんどのWeeping willowは*S. babylonica*ではなく、また、“*S. babylonica*”と呼ばれてヨーロッパや北米で現在栽培されているものは全て雌株で、おそらく同じクローンからなる遺伝子上同一なグループであるとしている。

近年のイギリスで発行されている植物図鑑には、*S. babylonica*について以下のように記載されている。

- ①Stace（1997）：中国原産、原種のWeeping willow、ブリテン諸島には稀である。しかし、*S. alba*と*S. fragilis*との交雑種と誤認されていることが多い。
- ②Hutchinson（2002）：イギリスでは20世紀初頭までに*S. alba*×*S. babylonica*（*S. × sepulcralis*）におきかわった。
- ③White（2005）：*S. babylonica* ‘Pendula’をChinese weeping willowとして掲載。しかし、これは今日ではめったに見られず、そのかわりに様々な他のWeeping willow（*S. babylonica*×*S. fragilis*、*S. babylonica*×*S. alba* var. *vitellina*）が栽培されている。
- ④Sterry（2007）：中国原産のChinese weeping willow。これよりもポピュラーなWeeping willowは本種とWhite willow（*S. alba*）との交雑種*S. × sepulcralis*である。

以上をまとめると、次のようになる。日本のシダレヤナギは*S. babylonica*のしだれ性の強い個体群で、ほとんどが雄株である。一方、欧米のWeeping willowの起源は同じくしだれ性の強い*S. babylonica*であるがほとんどは雌株である。また、今日では*S. babylonica*そのものはほとんど見られず、*S. alba*との交雑種である*S. × sepulcralis*などが多く見られる。

この*S. × sepulcralis*であるが、Stace（1997）とWhite（2005）は黄色い小枝

をもつものをnothovar. *chrysocoma*とし、Sterry(2007)でも黄金の葉を持つとしている。また、大橋(1995)も「ヨーロッパの特に中部以北で庭園や公園に植えられ、シダレヤナギのように見えるのは、コガネシダレ*S. × chrysocoma*である。このヤナギはシダレヤナギとセイヨウシロヤナギ*S. alba*の変種var. *vitellina*との間の雑種である」としている。

シダレヤナギの近縁種には以下のものがある。

- ①ロッカクヤナギ (f. *rokkaku*):枝が地面に達するほど長くのびるため、ジズリヤナギの別名を持つ。ロッカクは遣隋使の小野妹子が隋から持ち帰り、京都の六角堂に植えたという伝説による。
- ②セイコヤナギ (f. *seiko*):シダレヤナギに比べて節間と葉柄が短く、葉が枝から開出し、枝は長く下垂しない。セイコは中国の西湖である。別名コシダレ。
- ③マガタマヤナギ (f. *annularis*):葉は勾玉型に円を描くように巻く。別名メガネヤナギ。
- ④ウンリュウヤナギ (var. *matsudana* ‘Tortuosa’):中国原産で、枝や葉がねじれ曲がって伸びる。1915年に小泉源一がねじれの無いペキンヤナギを*S. matsudana*として発表しウンリュウヤナギはその園芸種とされたが、近年では*S. matsudana*はシノニムとされ、いずれも*S. babylonica*の変種とされる場合が多くなっている。

5. おわりに

前述のように、ヤナギはもともと多形で地域ごとの分化も進んでおり、近縁種同士で容易に交雑するため分類上未解決の部分が多く残されている。その上、地味な花や実が種の同定を一層困難にしている。しかし、大まかには日本では在来種を「楊」、シダレヤナギを「柳」と書き分けたように、欧米でも葉が幅広く円みを帯びるものをSallow、葉が細長くしだれるものをWillowと区別するようである。

日本の川辺の風景に欠かすこのできない「楊」であるが、近年では私たちの生活様式や河川環境の変化と共に日本人にとって身近な植物ではなくなりつつある。万葉人の感性に思いを寄せながら、河原に下りて「楊」を探してみたいかがだろうか。

参考文献

- C. D. Preston, D. A. Pearman, T. D. Dines. 2002. *New Atlas of the British and Irish Flora*. Oxford: Oxford University Press.
- Clive Stace. 1997. *New Flora of the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Frank S. Santamour, Jr. and Alice Jacot McArdle. 1998. *Cultivars of Salix babylonica and other Weeping Willows*. *Journal of Arboriculture*, 14(7): 180-184.
- 長谷川義人. 2001. ヤナギ科, 神奈川県植物誌2001, 528-545. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 飛田範夫. 1998. 奈良時代までの庭園植栽. *ランドスケープ研究*, 62(1): 56-66.
- John White, Jill White, S. Max Walters. 2005. *A Field Guide to the Trees of Britain and Northern Europe*. Oxford: Oxford University Press.
- 鎌田正, 米山寅太郎. 2004. 新漢語林. 大修館書店
- 北村四郎, 村田源. 1979. 原色日本植物図鑑, 木本編Ⅱ. 保育社.
- 水上静夫. 1994 ヤナギと中国文化, 園芸植物大事典, 2: 2586. 小学館.
- 日本聖書協会. 1983. 聖書. 日本聖書協会. 東京.
- 大橋広好. 1995. シダレヤナギ, 植物の世界, 68: 242-245. 朝日新聞社.
- Paul Sterry. 2007. *British Trees*. London: Collins.
- 佐々木信綱. 1954. 新訓万葉集, 上巻, 下巻. 岩波書店

謝辞

写真4、5、7、8は川口市の武藤朗さんからご提供いただきました。ここに感謝の意を表します。